

おしゃべりの基本は「等話」

会話だっつてお互いさまの精神で

おしゃべりをすれば、なんとなく安心でき、気持ちもすっきりすることがある。その、おしゃべりの基本は「平等な会話Ⅱ等話」という松田氏が、その極意を伝授。短く話しては問いかけするなど、五つの心がけにナットク。対面、オンラインなど多様なおしゃべりの姿を聞いてみた。

尚絅学院大学人文社会学群教授

松田道雄

●まつだ・みちお 1961年山形生まれ。山形大学大学院修士課程修了。山形県埋蔵文化財センター調査員などを経て、現職。主な著書に『駄菓子屋楽校—小さな店の大きな話』『等話 平等な会話が、あなたの人生と社会を変える』（ともに新評論）など。

平等な会話とは何か？

——感染予防という観点から、周囲の人と、うかつにおしゃべりもできないということになってしまいました。

そうですね。二〇二〇年から、新型コロナウイルスが猛威を振るい、できるだけ家から出ず、なるべく人

と会わないで過ごすのがいいという生活になってしまいました。人と直接話す機会を激減させた方は大勢い

らっしゃるでしょうし、特に「無駄話」に興じるなどとんでもないといった風潮になりましたね。

しかし、人は集団で暮らす生き物ですから、そこには必ず会話が生まれます。会話こそが、人と人とかかわる玄関口なのです。ところが、

わってきました。シニア世代と子どもたちの交流を目的とした「だがし

や楽校」を始めたのも、家庭や学校や職場とは違う場所で、さまざまな世代の人たちが自由におしゃべりできる機会をつくるためです。そうした一見たわいもない、意味もないように思える会話の中に、人とのかわり方を育む機能があると考えたからです。

シニア世代にとって、小さな子どもたちとのかわりは、元氣や癒しをもたらえるひとときです。子どもたちにとっては、親でもない、先生でもない人に、その日一日の出来事や、思っていることを気兼ねなく話せる時間になります。

会話は文字と違ってその場で消えてなくなりません。もちろん知識や情報も得られますが、会話から得られるものは、それよりも安堵感や安心

感のような感覚に訴えるものが大きいと思います。学校や職場ではどう

しても上下関係がつきまといますが、「だがしや楽校」のような空間には上下関係はありません。フラットな関係だからこそ可能になる会話、そのことがとても大切なのです。

私は、このような「平等な会話」のことを略して「等話」と名づけ、「等話の心がけ 五カ条」を定めました。

- 心がけ1 今、目の前の人との出会いに感謝する。
- 心がけ2 お互いの話す時間が平等になるよう、心がける。
- 心がけ3 自己完結せず、短く話して、問いかける。
- 心がけ4 相手の話に耳を傾け、返答し、短く話して、また問いかける。
- 心がけ5 この場で生まれる話を、

ともに作ろうと心がける。

文字にすれば、みな当たり前のことのようにですが、こうしたことをあまり意識することなく会話している人が多いのではないのでしょうか。

対面による日常会話が減ってしまった今だからこそ、もう一度、会話の大切さ、そしてその会話はどうあるべきなのかについて考えてもらいたいと思いますね。

——具体的にはどのように？

以前からですが、シニア世代を対象とした生涯学習講座や、大学の授業を講義形式で一方的に話すのではなく、グループワークで進めてきました。大学では百人規模の講義もありますが、そうした授業でも友達同士で固まらず、初めて話す人が隣になるように座ってもらい、私が提供した話題について、まずは隣の人と